



ヤンデレ妹に 愛されすぎて 子作り 監禁生活②

YandereImoutoni
Aisaresugite
Kozukuri
KankinSeikatsu

栗栖ティナ
挿絵 / 竹馬2号

試し読み版

プロローグ 兄勇者と妹賢者

「お兄様！ お怪我はありませんか？」

集団で襲いかかってきた魔物——恐るべき怪力を誇るオーガ。

その最後の一匹を軽装鎧に身を包んだ少年が斬り捨てると同時に、背後の木陰からブロンドヘアの少女が飛び出してきた。

肩にぎりぎりかかるくらいの長さに伸びた、ウェーブのかかった美しい髪。

歩みに合わせて端を金糸で装飾されているケープが、そして大胆に開いた聖衣の胸元から覗く豊かな乳房が揺れる。

「ああ、大丈夫……って、わぷっ!？」

血を払った剣を鞘に戻した少年が止める間もなく、少女は手の平で掴みきれないほど大きな胸を押しつけるかのように、正面から抱きついてきた。

「リオンお兄様、痛いところがあったらすぐ言ってくださいね。メルのリcovery魔法で、傷跡一つ残さずに癒やしますから」

「大丈夫だよ、メル。この程度の連中に遅れを取らないさ」

青い瞳をきらきら輝かせ、上目遣いで訴えるブロンドヘアの少女、メル。

もし彼女が犬なら、頭上の三角耳や尻尾がひよこひよここと元気に揺れているであろうくらの勢いと甘えっぷりに、兄である少年——リオンは苦笑する。

「それに……そろそろメル一人だけ隠れているのは嫌です！　メルだつて戦えることは、お兄様も知っているでしょう？　ちよつと、ううん、凄く過保護だと思えます!!」

「ははっ、ま、まあ、うん、それは知ってるさ。けど……その……メ、メルには痛い思いをして欲しくないって思うし。それに、そのお……ほら！　回復役に万が一のことがあると取り返しが付かないから。念には念を入れての作戦だよ」

軽く頬をふくらませて抗議してきた妹に、リオンは目を泳がせながら、どうにか彼女が納得してくれそうな説明を捻り出した。

（嘘じゃないけど、それ以上に色々……あははっ）

「ふふ、わかりました。お兄様がメルのことをとつても大事にしてくれる気持ち……本当に幸せです。でも、メルもお兄様と同じくらい……この世界のどんなものよりもお兄様のことを大切に思っていますから！　力が必要なときは、いつでも言ってくださいね」

「うん、頼みにしてるよ。俺、魔法はさっぱりだけど、メルは凄いいもんな」

どうにか上手く誤魔化せたことにホツとしながら、今度は本心で答える。

ショートブーツに刻まれた十字架が印象的なその衣装のとおり、彼女は自分たちが住むラヴァンド王国——否、この世界『ミューゲ』全土を見渡しても並ぶ者はいないであろう、

回復魔法の使い手。長い歴史の中、片手で数えられるほどしか与えられた者がいない、『賢者』の称号で呼ばれる存在なのだ。

その魔法は、瀕死の重傷でも癒やしてしまうほど強力なもの。

幸い、この短くはない旅の中、まだその力が必要になるほどの危機に陥ったことはないが、これから待ち受ける大一番では何が起こるかわからない。

そのとき、自分は今のようにしつかり妹を守りきれぬだろうか。

一抹の不安が胸を過るが、それを振り払って気を取り直す。

「それはともかく……メル、そろそろ離れろって」

いつまでも抱きついたらままの妹へ、苦笑混じりに伝える。

お互いにもう子供とは言えない年齢なのに、彼女は自分に対してだけは幼い頃と変わらない甘えん坊のままだ。何かとこうして抱きついてくるし、歩くときも特別な理由がない限りは手を繋いでくれとせがんでくる。

「お兄様、メルがくっついてると……ご迷惑ですか？」

「い、いや、そんなことはない！ ただ、今、汗かいてるから……臭いだろう？」

思った以上に沈んだ表情で問いかけてきたメルへ、慌てて理由を説明する。

彼女はさつきからずっと胸板に鼻先を擦りつけてきているから、どうしてもそれが気になつてしまうのだ。

可愛い妹に『臭い』なんて言われると、ちよつと、いや、かなり傷ついてしまう。

「大丈夫です。お兄様、とつてもいい匂いがします♪ こうしていると、何だかうつとりしちゃうくらい……気持ちいい匂い……はふっ」

そう言い放ったブロンドヘアの少女は、むしろ匂いを嗅ぎたいと言わんばかりに胸板へ頬ずりしてきた。

（いや、いい匂いなのはメルのほうが。……つて、な、何を言ってる、俺！）

顎下でふわふわと揺れるブロンドの髪からは、まるで咲き乱れる薔薇のように甘く香しい匂いが漂ってきている。

嗅ぐだけで胸が高鳴り、身体の芯が熱くなってくるような官能的な香りだ。

「お兄様、どうかなさいましたか？ 胸……ドキドキ鳴っていますけど。ふふっ、メルの胸と同じですね♪ 何だか、ちよつと嬉しい……」

小首を可愛らしく傾げて尋ねてきたメル。雪のように白い頬が、今は桜の花びらのごとくほのかに色づいていて、それが清楚な可愛らしさをより強調している。

「えっ、あ、い、いや、戦い終わったばかりだからさ！ あははっ」

見とれそうになつたりオンだが、理性を振り絞ってどうにか誤魔化し笑いを返した。（妹相手に何を……落ち着け、俺！）

気づかれないように深呼吸をして、どうにか気持ちを静める。

取り乱している暇はない。ここは魔物たちの支配地の最深部近く、いつ、今のような襲撃があつてもおかしくない場所なのだから――。

「……っ!? メル、動くな!」

「えっ、お、お兄様?」

刹那。背後から迫る殺気に気づいたリオンは、腰の鞘から剣を引き抜くなり、妹を背に庇うようにして振り返った。

魔法で放たれたであろう、石の矢が無数に迫ってきている。

少年剣士は目にも留まらぬ早さで淡い光を放つ剣を振って、それを切り払う。

「この程度っ……おおおお!」

気合いに合わせ、剣が青白い光を放つ。

リオンが『勇者』として認められるきっかけとなった、彼にしか扱うことができない伝説の聖剣ソレイユ。その力で魔法の石矢は脆くも砕かれていった。

「つつ……まだ隠れていたのか!」

破片で頬に小さな切り傷を負ったが、幸い、被害はそれだけで済んだ。

すぐに前方を確認すると、少し離れた大木の陰に、黒装束の不気味な影が見える。

リッチと呼ばれる、魔法の扱いに特化したアンデッドの最上位種だ。

さすがにこの辺りは出てくる魔物も並外れた強敵ばかり。しかし、負けるわけにはいか

ない。リオンは気を取り直し、次の魔法を撃たれる前に勝負を決めようと駆け出す。

だが、その少年を——ブロンドの髪を靡かせる影が追い抜いていった。

「あなた……お兄様に傷を負わせましたね？」

いつの間に背中から離れたのか。次の魔法を構築しようとして杖を構えたりツチの目前に、メルは静かな笑みを浮かべ、悠然と迫る。

「あなたごとき死に損ないのゴミクズが、メルのお兄様を傷つけるなんて、そんなことが許されると思っているのですか？ ふふつ、脳みそが腐り果てているんですよね、それもわからないなんて。ふふつ、あははっ……絶対に許さない」

途中までは声の上擦るほどの早口で、そして最後はまるで氷のように低く冷たい声で言い放ったブロンドの賢者が、懐から赤い宝石を取り出した。

「現れなさい——ブラビュラ」

メルがそれを軽く投げると、赤い宝石が目が眩むような光を放つ。

次の瞬間、それは彼女の背丈と同じくらい長い、一本の杖に姿を変えた。

否、それは杖と呼ぶには少し形が違っている。

長い柄の先に宝石が付き、そこからまるで斧のような光の刃が伸びていた。

その武器が醸し出すただならぬ気配に、本来なら感情というものを持たないアンデッドのリッチが、数歩後ずさりしていく。



だが、まだまだ制裁が足りないと言わんばかりに、足下にたった一つ転がっていたリツチの骨片を乱暴に踏みにじっている。

思わず背筋が凍えてしまうほどの言い知れぬ迫力に、リオンはすぐに次の言葉を投げかけることができなかつた。

（これが怖いから、メルには戦わせないようにしてたんだよ……）

普段は心優しく穏やかな妹だが、兄を傷つけた相手に対しては一切容赦なくなる。

旅だつて間もない頃、町中で奇襲を仕掛けてきた魔物相手にリオンがわずかな傷を負つただけで激高したメルが、今と同じようにその斧で魔物を虐殺した。

その恐ろしい姿を目の当たりにした住民たちが魔物を見たとき以上に怯えてしまい、結局すぐ立ち去る羽目になったのだ。

兄として、妹のそんな恐ろしい姿はあまり見たいものではない。

はつきりそう言えば、自分にべつたりのメルが傷つくだろうと、彼女をできるだけ戦いから遠ざけるといふ解決策を取っていたのだ。

（そもそも、どうして賢者のメルの武器が斧なんだろう……）

彼女が持っている赤い宝石は、リオンが持つ聖剣の柄に飾られていたもの。

聖剣に選ばれた、悪を断つ運命を背負った救世主——勇者。

宝石は共に戦う仲間の武器として、最も相応しい形に姿を変える力がある。

メルがそれを持つと、彼女が『ブラビユーラ』と名付けた斧になるのだ。

(メルって回復魔法だけじゃなくて、戦士の才能もあるんだろうな……多分)
今の斧の攻撃は、勇者であるリオンでも目で追いきれない速さだった。

メルが回復魔法を覚えたのは、小さい頃から彼女を守るために戦い続け、細かい傷を負うことが多かった自分を癒やしたいという理由。

結果、横に並び立つ者がいないくらいに使い手となったが、戦士の道を志していればそれ以上の使い手になっていたのかもしれない。

「お兄様、ごめんなさい……怒っていらっしゃいますか？」

考え込んでしまったリオンの沈黙を勘違いしたメルが、不安げに問いかける。

「んっ……いや、そうじゃないよ。俺こそごめんな、つい警戒を怠っちゃって」

「いいえ、お兄様は悪くありません！ 兄妹仲良くしてるところに割り込んで来た、あの死に損ないのクズが悪いんです!! 徹底的に死なせてやりましたから、もう大丈夫です」
「可愛い笑顔に似つかわしくもない暴言を吐きつつ、斧杖を元の宝石に戻したメルが、また兄の胸に飛び込んで来た。

「お兄様、傷……痛みますよね？」

「んっ、いや、これくらい大丈夫だけど……せつかくだし、治してもらおうかな」

しがみつくメルから、兄の役に立ちたいという気持ちがひしひしと伝わってきた。

たいしたことのない切り傷だが、それならお願いしておこう。

そんな氣遣いでリオンが頼んだ直後。

「はいっ、わかりました♪ メルにお任せください……んっ」

満面の笑みで答えた妹賢者は、大きく背伸びをし——兄の頬に刻まれた赤い切り傷に赤い舌を伸ばしてきた。まるで飼い主にじやれる犬のように、傷口をチロチロと舐め出す。

「ひゃっ!? お、おい、メル!」

「んちゅっ、れろっ、はあ、はむっ、んっ、お兄様の血……もったいない」

頬がくすぐられるような感触に思わず仰け反って叫ぶが、うっとり目を細めたメルは熱心に舌を動かし、横に伸びた傷口をなぞるように舐め続ける。

耳に近い場所だけに、ぴちゃぴちゃと唾液が奏でる水音がはつきり聞こえてきた。

それが妹に顔を舐められているという異様な現実を否認なしに思い知らせてくれ、氣恥ずかしさに頬が熱く火照るのを止められない。

「こうして消毒しないと危ないですから、んちゅっ、はあ、少しだけ我慢してくださいね……れろっ、はあはあ、ああ、お兄様の味……匂い……素敵ですう♪」

「消毒って、魔法を使えば……」

「あまり回復魔法使いすぎると、身体に負担がかかってしまいます。これくらいの傷なら……ちゅっ、こうして普通に手当てしたほうがいいですよ。んうっ……♪」

「回復魔法にそんな副作用あったのか。いや、それはともかくとしてだ、舐めるのは普通の手当てなのか……くうっ、ううっ」

明らかにおかしいと思うリオンだったが、妹の熱く濡れた舌先が頬を這う度、くすぐったさと何とも言えない心地よさを感じてしまう。

さっきまで感じていた痛みも少しずつ薄れ、何だかいつまでもこうしていたくなる。

「あふっ、んっ、お兄様、気持ちよさそうな顔……ふふっ、もっともっとたくさん手当てしますから。遠慮せずに全部メルにお任せくださいね」

心から嬉しそうに微笑む妹賢者。

瞳から光が消え、この状況に恍惚と酔いしれている。

その表情から感じる何とも言えない迫力に、リオンは圧倒されて押し黙ってしまった。

（メルは嫌がってないし、これが治療っていうなら……このままでいいのかな。いや、でも兄妹でこれは……さすがに……）

普通ではないとわかっているが、妹の舌で頬を愛撫される心地よさに理性が押し流されていく。もう、抗うことは不可能だろう。

（この旅の間に、気持ちのケリをつけるって決めてたのにな……俺）

「んっ、もう血が止まりました。美味しい味、しなくなつて……ちよつと残念ですけど、よかった……んふっ、はあ、でも、もう少し消毒う、ちゅっ、れろお」

リオンがそんな複雑な思いを噛み締めている間も、メルは熱心に舌を動かし、その合間にさりげなく唇も押しつけてきていた。

身体をくねらせ、お腹の辺りへ聖衣越しにもはつきりわかるほど柔らかい双乳を擦りつけてくる。全身を使って甘える、この兄妹には日常茶飯事の光景だ。

「メルっ、それ、キ、キスみたいなの……んっ、ううっ、ああ」

「治療だから、いいんです。ちゅっ、はむっ、はあ、くすぐりたいの我慢して、最後まで頑張ってくださいね、お兄様あ……れるっ、あはっ、んんっ♪」

兄勇者は同じ轍を踏まないように警戒を続けながらも、妹の愛情溢れる『治療』を止められず、そのままずっと身を任せてしまった――。

幼い頃、村が魔物に襲撃される不幸に見舞われて両親を失い、それから十年以上二人だけで暮らしてきたリオンとメルの兄妹。

妹を守る強さを身につけたい。その一心で鍛錬を続けたリオンは、いつしか近隣に名を轟かせるほどの剣士に成長した。

そんな彼が腕試しにと訪れた古い洞窟の奥で、硬い岩に刺さった状態で封印されていた剣を引き抜いたのは一年ほど前のこと。

村の神父が、それこそ世界の魔を払う運命を担う勇者にしか引き抜くことができない聖

剣だと気づき——リオン、そしてどうしても彼から離れたくないというメルは、それから間もなく王都に呼び出された。

「お待ちしておりました、勇者リオン」

「は、はい!! あの、た、た、ただいま、参上しました!」

いかめしい鎧に身を包んだ騎士や、豪華な装束に身を包んだ貴族が並ぶ王城の最上階、玉座の間。そこに通されたりオンは赤いカーペットのの上に跪き、玉座から自分に微笑みかけてくれている桜色の長い髪が印象的な美女を見上げる。

彼女がヴィクトリア。このラヴァンド王国唯一の姫であり、魔王軍との戦いで傷つき、療養中の王に代わって政務を執っている、国を支える存在だ。

清楚なイメージを漂わせる白いドレス。

形良いバストが零れ落ちそうなくらい胸元が開いているが、それでも卑猥な雰囲気を感じないのは姫という高貴な存在が持つ、独特のオーラ故だろうか。

穏やかに微笑みかけてくる顔立ちは、まるで女神のように優しく、美しい。
(メル以外でこんな美人見るの、初めてだ……って、姫様に失礼だ)

思わずそんなことを考えてしまい、慌てて心の中で自分を叱咤する。

ふと隣を見ると、同じく跪いて挨拶しているメルが、いつになく不機嫌そうな顔で兄を睨みつけてきていた。

彼女も余計なことを考えるなど怒っているのだろう。

(いけない、いけない……しつかりしないと)

妹の前では、いつも格好よく頼もしい兄でありたい。両親を亡くし、その寂しさと不安でいつも泣き暮らしていた彼女に笑顔を取り戻すため、幼い頃にそう誓ったのだから。

そう気を取り直すと、リオンは自ら話を切り出す。

「俺を……いえ、私をお呼び出しになられたのは……あれ、えっと」

「ふふっ、大丈夫です。普段どおりに話してください。今は戦時中、過剰な礼儀作法より大切にしなければいけないことが多くあります」

慣れない丁寧語に四苦八苦していた少年を、桃色髪の姫が優しく慰める。

ずっと小さな村で暮らしていたリオンにとっては、ただ居るだけで胃が痛くなるような厳粛な玉座の間の空気。それがヴィクトリア姫の言葉で一気に軽くなった。

「ありがとうございます。それで……俺が呼び出されたのは、魔王討伐の件ですね」

「そのとおりです。リオン様も知つてのとおり、魔王バンディの侵攻は激しさを増す一方です。既に国境付近の村や町の多くが支配され、多大な犠牲が出ております」

大きくうなずいたヴィクトリアが、悲しそうに目を細めてため息を漏らす。

古くから人間と魔物の間には幾度も戦いが繰り広げられてきた。

この百年ほどは大きな争いは起こっていないが、その束の間の平穏を破った者こそ

が魔王と呼ばれる魔物たちの支配者、バンディである。

「自分に従わない者は同じ魔物ですら容赦しない残酷な魔王が、およそ五年ほど前に魔物の大軍を率いてラヴァンド王国へ侵攻を開始した。

王国側も騎士団を総動員して迎撃に当たっていたが、次第に追い詰められ、このままでは敗北を待つのみという状況に陥っている。

「長い戦いで我々は傷つき、多くを失いました。この状況を打破するには、魔王バンディを討つ以外にありません。そのために腕自慢の多くの騎士が旅立ちましたが……残念ながら、未だに誰一人帰ってきた者はおりません」

それがすべて自分の責任と感じているのだろう、姫は膝に置いた手を震わせ、スカートの布地をギュッと掴んでいた。

それでも涙して嘆くことはない。頂点に立つ自分が取り乱すところを見せられないと自制しているのだと、リオンにはすぐ察しがついた。

それは、妹を前にした自分も同じことだから。

「俺が行きます、姫様！ 正直、どうして俺が聖剣に選ばれたのかはよくわかりませんけど……剣には自信があります。必ず、魔王を倒して見せます！ だから……」

力強く宣言したリオンは、その代わりに条件を提示しようと言葉を続ける。
危険な旅に妹を連れていけない。この国で一番安全であろう、この城で保護しておいて

もらえないか。そう切り出そうとしたのだが――。

「私も兄に同行させてください。回復魔法の腕には自信がありますし、それは傷を負っていた騎士団の方々に証明いたしました。勇者であるといえども、魔法が不得手な兄一人ではあまりに危険が多い旅……癒やし手は必要でしょう」

横に跪いていたメルが、兄に甘えるときはまるで違う硬い口調で切り出した。

「メ、メル！ お前、何を……」

「お兄様一人で行かせられません。それに……亡くなったお父様やお母様の分まで、いつも一緒にいてくれると約束してくれたでしょう？」

慌てて止めようとしたリオンに、そうはさせないとメルが微笑みかけてくる。

しかし、魔王相手の危険な旅に彼女を連れていくなど、決して認められない。

「いくら癒やしの魔法が得意と言っても、そんな……」

言葉を濁したりオンは、姫様が直々に止めてくれないかと期待して視線を向ける。

「メル様、あなたの回復魔法の素晴らしさは騎士たちから報告を受けています。既に見放されていた瀕死の騎士たちすら救ってくださったと。改めてお礼申し上げます」

「いえ、当然のことをしたまです。それに、私の力を認めていただくには一番の方法だと思われましたので」

軽く頭を下げたヴィクトリアに、メルがそう微笑み返す。

「騎士を救ったって、メル、いつの間に……」

そう言えば昨日、いつも自分にべったりの彼女が珍しく一人で出かけたと言って、宿を出ていった。そのときに、怪我を負った騎士たちの集まる療養所を訪れたのだろう。

「メル様、あなたほどの回復魔法の使い手は、この王国に……いえ、長い歴史書を紐解いてみても見つからないほどです。私から、あなたに相應しい『賢者』の称号を授けたいと思います。どうか勇者である、あなたのお兄様を助けてあげてください」

「はい。『賢者』の名にかけて、任務を成し遂げて参ります」

リオンが口を挟む間もなく、頼みの姫様とメルの間で話が終わってしまった。
(まさか、そんな下準備してるなんて……)

リオンが呆然と横顔を見つめていると、それに気づいたメルが瞳を潤ませた。

「お兄様……お願い、私を一人にしないで」

「っ……メル……」

両親を失って間もない頃、今と同じ台詞で自分にしがみつき、お風呂でも寝るときでも自分から離れようとしなかった悲しげな妹の姿が脳裏に甦った。

いくら危険な旅に出ると言っても、彼女にまた、あんな顔をさせたくない。

そう思うと、ようやくリオンも決心がついた。

「わかったよ、メル。……俺が守るから」

「うん、お兄様と一緒になら……きつと大丈夫。メル、信じてます」

兄の言葉を聞いた途端、メルはパッと顔を輝かせる。

そのまま我慢できないと言わんばかりに立ち上がり、驚くりオンへ飛びついた。

「お兄様、頑張りましょうね！ ふふっ」

「こ、こら、メル！ 場所を弁えろって……おいつ!!」

首に手を回し、嬉しそうに頬ずりしてくる妹を咎め、周囲の様子をうかがう。

並ぶ騎士や貴族たちが呆れたように顔を顰めているが、ただ一人、玉座の姫様だけは楽しそうに笑みを浮かべていた。

「仲がよろしいんですね。……ふふっ……とつても素晴らしいことだと思えます」

「ど、どうも、その……いつまでも甘えん坊な奴で。あはは……」

苦笑するリオンに、ヴィクトリアが『そう言えば』と問いかけてきた。

「もし使命を果たして戻ったときには、もちろん相應の報奨をもってお迎えいたします。巷で噂になっているかもしれません……」

「え、ええ、噂は聞きました……その……」

優しい眼差しで見つめてくる、清楚で美しい姫君。

魔王を討伐した者には、その報奨として彼女と次の王になる権利を与えられる。

そんな噂を、今までずっと田舎暮らしのリオンでも耳にしていた。

(姫様と、結婚……か)

思わず見とれてしまう、伝説に残る女神のような美しさ。

彼女を娶れるのは、男としてこの上ない幸せだろう。

……他に、心から思う人がいないのなら。

(いや……いいんだ。姫様には申し訳ないけど、けじめをつけるには……ちょうどいい機会なのかもしれないな)

勇者に任命された少年の心を、幼い頃からずっと埋めている最愛の少女。

いつまでも彼女を愛し続けたいが、それは許される想いではないのだ。

(メル……俺は……)

この想いに縛られていたら、彼女が自分のもとを巣立って新しい幸せを見つけることを邪魔してしまいかねない。

愛しているからこそ、振りきらなければいけないのだ。

(こんな理由で求婚するのは、本当に失礼だけど……すいません)

リオンは心の中で優しく美しい姫様に謝罪する。

もつとも、すべては気が早い話だ。

恐るべき魔王を倒せるのかどうか、まずはその心配をしなければ……。

そう気持ちを引き締めた——刹那。首に回された妹の手に、強い力が入った。

「姫様、兄は報奨など目当てにしておりません。純粹に人々の平和を願い、その身を捧げようとしているのです！ 報奨はすべて辞退いたします」

「えっ……お、おい、メル？」

キツと目をつり上げたメルは、まるで仇でも見るように姫様を睨んでいた。

リオンはその言葉の内容より、無礼と咎められそうな態度に驚いてしまう。

「そうでしょう、お兄様？ お金も名誉もいらなそうです。お兄様は私がいれば、それでいい……それで幸せですよ。違いますか？」

「い、いや、あの……うん、まあ……」

本心では、地位も名誉も興味ない。妹と二人、飢えない程度に暮らせる土地を故郷の村に持っているし、蓄えもある。

何より、メルの幸せや世間の目を考えないのなら、妹である彼女をいつまでも独占し続ける。それがリオンにとって最大の幸せなのだから。

どう答えるべきか言葉に詰まっていると、その空気を和ませる小さな笑い声が、玉座から聞こえてきた。

「本当に仲がよろしい兄妹なのです。メル様、失礼しました。確かにリオン様は、報奨目当ての欲深い方には見えません。今の言葉は、私なりに辛い使命を受けてくださったお二人の気持ちに応えたい、その一心です……」

その後、小声で何か付け足したようだが、それは兄妹の耳に届かなかった。

とにかく、ヴィクトリアのその言葉で、刺々しかったリオンとメルの間的气氛、そしてメル
の非礼を咎めようとしていた騎士や貴族たちの剣呑な空気も和んだ。

「……私こそ、失礼いたしました」

少し名残惜しげにリオンから離れたメルも、落ち着きを取り戻したのか再び玉座にうや
うやしく頭を下げ、謝罪する。

「あ、あの、とにかく……俺は魔王を倒して見せます！」

リオンもそれに合わせて頭を下げ、改めてそれを誓う。

考えることは色々あるが、すべては戦いを終えてからでいい。

自分自身にそう言い聞かせ、視線にもその思いを込めて姫君を見つめる。

「わかりました。お二人に神のご加護を……私もここからお祈りいたしております」

そんな兄妹に、ヴィクトリアは何故か少し楽しげな表情で声をかけてきた――。

（戦いが終わってからって考えてたけど、それもいよいよ明日だな）

深い森の奥深く。メルが張ってくれた狭い結界の中、たき火の傍に横たわったりオンは
星空を見上げてしみじみと考える。

不気味に生い茂る木々の向こうには、月明かりに照らされた古城が見えていた。

魔族の拠点である、ここ深淵の森。

その最奥にある魔王城が、文字どおりすぐ目の前にあるのだ。

夕刻にここまでたどり着いた二人は、万全を期して戦いに挑むため、今夜はここで休むことに決めた。

どんな魔物の目も欺く、メルの高い結界魔法があるからこそその作戦だ。

(狭いけど、まあ強い魔法なんだからあまり広くはできないよな)

苦笑しながら、自分にギョツとしがみついて眠る妹を一瞥する。

冷え込みがきつく、火を絶やすことはできない。そうになると、こうして身を寄せあわなければ横になれないくらい、結界の範囲は狭いのだ。

寝返りを打つのも気を遣ってしまうが、夜になると両親を亡くした日の悪夢にうなされるところというメルとは、いつもこうして寄り添って寝ている。

その距離が少し小さくなったただけなのだから、慣れたものだ。

(それに、今日はあまり眠れそうにないしな)

ここまで、多くの魔物を打ち倒してきた。その中には魔王直属の名高い魔物も少なくはなかったし、自信はある。

だが、魔王の強さはどれほどのものなのか想像できない。

聖剣を持つ自分でもかなわないほど、圧倒的だとしたら……一緒に乗り込むメルも無事

では済まないだろう。

「んう、お兄様……？ 眠れないのですか？」

リオンの重苦しい雰囲気気づいたのか、目を覚ましたメルが問いかけてくる。

「ごめん、起こしちゃったか。その……色々考えていてさ。メルは、ここで帰ってもらったほうがいいかもしれないって」

そう呟いた途端、メルは自らの豊かな乳房が潰れるのも構わず、リオンの腕にしつかりとしがみついていた。

「帰りません！ メルはずっとお兄様と一緒にです!!」

「でも、相手は魔王なんだ。万が一のことがあったら……っ……」

「そのときは、メルも一緒に死にます！」

「バカを言うな！ もうメルも子供じゃない。村で人気あったしさ、帰ればいい旦那さんも見つけられるだろう。そうやって、幸せに暮らしてくれば……」

最愛の妹が誰かのもとに嫁ぐ。想像するだけで胸が切り裂かれそうなことを、彼女のためだと我慢して口にする。

だが、妹賢者はまるで腕をへし折らんばかりの勢いでしがみつき、青い瞳に大粒の涙を浮かべて訴えてきた。

「メルの幸せはお兄様です！ お兄様以外の男なんて興味ありません!! 挨拶するくらい

なら我慢できませんけど、結婚なんて……それこそ死んだほうがマシです！」

「い、いや、そこまで言わなくても……」

そう言えば、村でメルに告白したという男が、まるで廃人のようになってそれからずっと家に引きこもってしまったという事件があった。

あの男は結局村を出ていってしまって、何があったのか聞けなかったのだが――。
(やめよう、うん、考えても仕方ないし)

自分を傷つけた魔物を、大斧で八つ裂きにするときのメルの姿が脳裏を過り、慌ててそれを振り払う。

「お兄様、もしメルを連れていかないと言うなら……いつそ、ここで……お兄様の手で殺してください！ お兄様の手にかかるのなら……」

「そ、そんなことできるわけないだろうっ！ ああ、もうっ……わかったよ、メルがそこまで言うなら……最後まで一緒だっ」

彼女を思いとどまらせるのは無理だと諦め、覚悟を決めて認める。

「お兄様……メル、嬉しい！ どこまでもずっと……一緒です♪」

やっと表情を和らげたメルが、腕に抱きつく力も緩め、甘えるようにすり寄ってきた。

爆乳の谷間に二の腕が挟まれ、そこが扱かれるような動き。長い旅路の間、欲求不満を解消することなどできずにいた兄勇者は、それだけで下腹部が熱くなってしまう。



「あうっ、あ、あの……もう寝よう、メル！ ……明日も絶対に俺が守る……メルのは必ず守るから！」

このままでは我慢できなくなってしまうそうだと、慌ててそう宣言する。

「本当に、ずっとメルを守ってくれますか？」

動きを止めたメルが、少し不安そうに上目遣いで問いかけてきた。

今更、念を押すなんて珍しい。そう思いながらも、リオンは大きくうなずく。

「ああ、ずっと守る！」

「ずっと、いつまでも……ふふっ、そうです。メルもずっと、ずっとお兄様に守ってもらいたい……他の男なんていらぬ……姫様だつて」

嬉しそうに小声で呟きながら、メルは抱きつく腕にまた少し力を込めてきた。

「お兄様が守ってくれる……ずっと……ずっと……一緒に、いつまでも♪ ふふっ、

素敵……私、今、とつても幸せですよ、お兄様あ……あははっ、あはははっ♪」

夜空を見上げる青い瞳から光が消え、少し不穏な空気が漂う。

気になったリオンだが、視界に再び魔王城が入ったことで気持ちを切り替えた。

（明日……とにかく頑張ろう）

誰よりも愛しい妹を守り、魔王を倒す。今はただ、それだけを考えよう。

そう心を決めた兄勇者は、集中するために硬く目をつむったのだった。

直後、彼女は柔らかな尻肉を兄の腰で弾ませるように、激しく動き始めた。

ずちゅつ、にちゅりいっつ、ずつぷうううつ、ずぶぶぶつ！

「うぐつ……くううう！　メル、動きすぎだつ、あぐつ、あああ！」

結合部から漏れ響く水音が一気に大きくなり、それに合わせて絶え間なく蠢く粘膜に怒張が扱かれる。ぴったりと吸いつく粘膜に表皮を舐められるような摩擦は、あつという間に腰が抜けてしまいそんな恍惚の快感を与えてくれた。

飛びそうな意識を何とか繋ぎ止めようと歯を食いしばる口元から、魔王を倒した勇者とは思えない弱々しく情けない喘ぎが漏れてしまう。

「お兄様、とつても可愛らしい声♪　メルのおま○こ、妹ま○こにもつともつとのめり込んでください♪　いいんですよ、メルのおま○こはお兄様を悦ばせて、お兄様の赤ちゃんを孕むただけにある場所なんです。もつと激しく、いっぱい突いてください。お兄様のチンポの形のまま、戻らなくなっちゃうくらいして欲しいですう」

少しずつ前のめりになってきたメルは、先ほど自らの舌で散々舐め清めた兄の胸板に両手を突き、お尻を大きく振るようにして腰使いを加速してくる。

じゅぶうつ、ずつぷううう！　ぱちんつ、ぱああんつ！！

「はぐつ、ふあああつ、ひふああああ！　イイツ、お兄様チンポおつ、メルのおま○こ、子宮にガンガン当たつてえ、はへえ、ふあつ、んふああああつ♪」

嬌声と派手な水音に混ざり、尻房が腰に衝突する乾いた音も鳴り響く。

それが、妹と獣のように交わっているのだとより濃厚に実感させてくれた。

「うぐっ、メル、はぁ、激しいいっ、んぐっ、ううっ」

呼吸することもままならないくらい、怒濤の勢いで押し寄せてくる悦楽。

息絶え絶えになりながら結合部を覗くと、肉竿と蜜壺の摩擦で派手に泡立てられた蜜液の色が、より赤く染まってきていた。

馴染ませる間もない激しい抽送で、破瓜の出血が増えているのかもしれない。

「メル、痛くないのか？」

「はふっ、んうっ、お兄様、こういうときもメルのことを気遣っていただけで、とつても嬉しいですよ♪ お兄様に愛されていると実感できて、あはっ、はぁはぁ」

「いや、こんなに血が出てるんだぞ！ んっ、せ、せめて魔法で治すとか……」

「そんなもつたいないことできません！ お兄様とメルが結ばれた記念の痛みなんですから……：はんっ、これえ、せ、世界で一番素敵な痛みですっ！ お兄様の赤ちゃんを産むときと同じくらい、いつまでも味わっていたい痛みっ、ですからっ、はふっ、んんうっ、たくさん感じながらお兄様と一つになっていたいっ、はん、くふぁああっ！」

もう半分正気を失っているのか、どこか遠くを見るような目で喘ぎ叫ぶ妹賢者。

膣内もより激しく抉り擦って欲しいと言わんばかりに収縮し、雁首が肉壁に食い込んで

強く弾かれる刺激が、兄勇者の官能をより高めていく。

「はぐつ、くうつ、メル、俺は、こんな……うつ、くううつ」

投げかける言葉も思いつかず、ただ淫らに踊る妹を見上げることしかできない。

狂おしい尻振りに合わせて、零れ落ちた双乳もたぶんっと悩ましく揺れる。

汗ばんで、ほのかに色づいたそこはますます扇情的に見え、一瞬、視線が釘付けになつてしまった。

「お兄様、メルのおっぱい気になるんですね。んふつ、どうぞ……触ってください。おま○こだけじゃなくて、もつと色々なところでお兄様感じたいですうつ♪」

「っ……い、いや、そんな……こと……」

一瞬うなずきかけてしまったが、紙一重で我慢する。

自ら能動的に求めるような真似をしたら、もう戻れなくなってしまう。

(というか、腕は縛られてるし……)

両手首に絡みつく触手を一瞥し、小さく息をつく。動きを封じられているこれがなければ、反射的に魅惑の双球へ手を伸ばしていたかもしれない。

「はふつ、んうつ、ああ、ごめんなさい！ その触手、邪魔ですよ。はふうつ、今、お手伝いしますから……んふつ、はあ、あんっ♪」

再び兄の視線にめざとく気づいた妹賢者が告げた途端、リオンの両腕を拘束している触

手がシュルシュルと音を立てて活発に動き出した。

「何だ、これ……ちよ、ちよつと、やめてくれ！ わぁあつ!？」

触手に操られるまま腕を上げ、目の前の乳丘に触れさせられてしまう。

手の平に半分も収まらない爆乳。じんわりと伝わってくる温もりと、焼きたてのパンみたいなふかふかとした柔らかさは想像のはるか上をいく心地よさだ。

「ああ、お兄様の手……いつもメルを守ってくれていた手でおっぱい気持ちよくしてもらえるなんて幸せですうっ、んふっ！ 強く、うんと強く揉んでください♪ お兄様の指の形を覚えさせてください♪ 早くっ、はんっ、ああ、あはっ」

メルは身体を前に倒し、積極的に乳房を押しつけてくる。

「ううっ、ダ、ダメだ。そんなの……」

ずっしりと重みのあるふくらみを手の平全体で感じていると、どうしても我慢できずに指へ力を入れてしまう。軽く押しただけでズブズブと沈んでいくが、完全に埋まるか否かぎりぎりのところで抵抗が強くなって押し返される。

「メ、メルのおっぱい……これが……」

いつまでも揉んでいたくなる、最高の手触りと弾力。止めなければいけないと思っているのに、ついには手の平全体で捏ねるように堪能し始めてしまう。

「くんんんんっ♪ ああっ、いいっ、しゅごいつ、お兄様に愛撫してもらえてるうっ、妹

としてじゃなくてえ、女として愛してもらえてるのっ、幸せえ……イク、んうっ、おっぱいだけですぐイキそうなくらい幸せです。はあ、はひっ！」

指の動きに合わせ、妹賢者は額に浮かぶ汗をまき散らすように首を振り、込み上げる悦びを隠すことなく吐き出す。

膣粘膜は皺の一本ずつが活発に蠢き、肉幹が優しく噛み締められるかのような刺激を与えてくる。深く沈むと、行き止まりの壁に龟头が埋まって息苦しいほど圧迫された。

「はあ、そこおっ、子宮！ メルの子宮に早くお兄様の精液届けてください。赤ちゃん作りましょう♪ メルとお兄様、本当に愛しあう者同士の赤ちゃん♪ 打算しかない牝豚姫となんかじゃ作れない、幸せな家庭をメルと作りましょう♪」

「待て、メル！ お、俺と姫様は必ず結婚するってわけじゃないし、そんなっ、くっ、ううううっ、頼む、もう……はふっ、はあ、あぐうっ」

ヴィクトリア姫へ尋常ではない敵愾心を燃やすメルを宥めようと言葉を並べるが、燃え上がる彼女を止めることはできない。

スカートの裾を派手に翻しながらの腰振りは加速し続け、膣壁は肉槍を搾るかのように奥へ向かって繰り返し波打つ。

「お兄様あ、もっと強く揉んで♪ お兄様も腰振って、メルのおま○こ求めてください。チンポで子宮をズボズボ突いてえ、孕ませて♪ メルの妹ま○こ、お嫁さんま○こに変え

てくださいっ、ほら、ほらあっ♪」

理性を失ったように、だらしなく口元を緩めて喘ぐメル。

その声に合わせて兄勇者を拘束する触手が再び動き始める。

「や、やめろ！ そんな……いけないっ、それだけはダメだ、ダメなんだよ！」

必死に叫ぶ声もむなし、リオンは絡みつく触手に引つ張られるまま腰を上下に振ってしまふ。手のほうは指の一本ずつにまで細い触手が絡みつぎ、形よい乳房を潰さんばかりの強さで揉むことを強いられる。

「くふううっ♪ そう、そうれえすうっ、それでいいのおっ♪ メルのこと、無茶苦茶にしてください、お兄様あっ♪ あはっ、しゅきっ、らいしゅきいっ♪ あははっ、みんな見てえ、メルとお兄様の子作り♪ 夫婦になるところ、みんなに見せつけてあげたいくらい幸せなのっ、はふっ、くんっ、はあ、あはあっ♪」

「メ、メル……くあっ、も、もう、無理……うぐっ、あああ！」

じゅぶりゅっ、ずつぶっ、ずつぶっ、ずぶぶぶぶっ!!

メルの動きに合わせて、無理矢理腰を突き上げさせられ、肉槍で行き止まりの子宮口を力強く突く。揉み潰している乳房も大きく揺れるような挿入だ。

メルが長年ため込んでいた兄への想いを表すような激しさ。リオンはそれを嬉しく思っってしまう自分を責めながら、耐えがたい射精衝動に飲み込まれていく。

「いいんですよ、お兄様♪ 誰にも文句言わせません♪ だから、思いっきりメルのことを孕ませてください。お兄様のチンポも、メルの子宮にいっぱい赤ちゃんの素を出したくてビクビクしてます♪ ほら、早く、早く♪ 種付け、種付け射精、メルの子宮に夫婦の証、プレゼントしてください。いいっ、イク、ああっ、メルもイキます！ いっぱいお兄様の愛を感じてえ、イク、イク、あはっ、お兄様を独り占めにしてイクううっ！」

妹賢者の嬌声が一オクターブ跳ね上がった直後、膺壺が肉幹を促すように大きく波打った。同時に兄勇者の腰の真下から新たな触手が生え、抵抗する間もなく力いっぱい突き上げることを強いられる。

ずりゅうううっ、ずつぶっ、ずぶりゅっ、ずつぶううううう！

肉粘膜を剛直で抉り擦る派手な挿入音。先端が槍のごとく行き止まりの壁を貫き、さらに温度の高い肉室に滑り込んでしまう。

愛しい妹に激しく求められる悦び。ペニス全体が甘美な痺れに包まれ、芯まで蕩けてしまいうような快感。勇者として数多くの苦難を乗り越えてきた少年でも、この誘惑を堪えることはできなかった。

「イク、俺もっ、あああっ、出る、メルの中で……イッ、くっ、ぐううう！」

びゅるるっ、びゅ——びゅぶっ、びゅるるるるるるるるるるっ！！

ドクンツと肉幹が激しく脈打つと、堰き止めていた欲望液が怒濤の勢いで迸る。



幸せそうに朱に染まった頬を緩めながら呟くメル。その言葉に、リオンは寝起きに口移しで飲まされた不思議な味のある菓のことを思い出した。

「ただの風邪薬じゃないと思っただけ、あれは一体……くっ、ううっ」

「メルとお兄様の素敵な未来のために必要なものなんです」 はうっ、でもおっ、正直に説明しないで飲ませてしまっただけでいい。んふっ、はあ、お仕置き……いけないメルにオチンポでもつともつと激しいお仕置きしてください。奥まで、あはっ、くんっ」

大きくヒップを振って誘う愛妹の声に、昂りに支配された兄勇者はそれ以上深く追及しようという気持ちで吹き飛んでしまう。

それよりも、彼女に求められるまま蕩ける蜜壺を貪欲に味わいたい。そんな熱い想いをどうしても止めることができなかった。

「メル……くっ、はあ、もう本当にやめられないぞ、俺！ くっ、あああっ」

「はい、やめなくていいですっ！ もつともつとメルを愛してください。お兄様のチンポでいっぱいお嫁さんにして♪ あはっ、あははっ、感じるっ、んうっ、メル、いっぱい愛してもらってるっ、あふっ、誰よりもっ、あんな牝豚よりもたくさんっ、あふっ、はふうっ、いいっ、はあっ、ひうっ、くふあああっ♪」

どんどん大きく上擦っていくメルの嬌声を聞きながら、一心不乱に腰を振る。

彼女もかなり高まってきているのだろう、絶頂の近づきを知らせるように絶え間なく波

打ち始めた膣粘膜を強く擦り、降りてきた子宮を持ち上げるように奥を打つ。

腰を突き出す度に火照る尻肌と衝突し、パンツと乾いた音が鳴り響く。

メル of 美しいブロンドの髪、それを飾る赤いリボンが揺れ、甘酸っぱい汗の雫や愛蜜が派手に飛び散る。

「凄いつ、これ、はあひつ、ううつ、お兄様あつ、メル、もう少しつ、んうつ、あと少しでイク……お兄様のチンポでえ、たくさん愛されてイキますつ、はあつ、はひつ。メルがイケたらあ、お兄様も射精できますつ。だから、一緒……一緒にイキましよう、思いきり気持ちよくなつてえ、メルのおま○こでドピユドピユしてえ♪」

次第に呂律が回らなくなってきたメルが、背筋を仰げ反らせて喘ぎ叫ぶ。

「一緒に……メルがイケば、俺も……はあ、はあつ」

彼女が絶頂すれば、自分も堰き止められてマグマのごとく煮詰まった精液を吐き出すことができる。そう思うと腰使いにも自然とスパートがかかってくる。

じゅびゆるつ、ずぶうううつ、ずぶりゅつ、ずぶつ、ずつぶうううう！

「くふああああつ、あはつ、あんん！ そうつ、そこおつ、いいつ、一緒につ、一緒にイキましよう、お兄様あつ♪ メルたちは夫婦ですから、一緒おつ、んふつ、一緒に気持ちよくなきなさいけないんですつ！ あはつ、くはつ、はあ、くううつ!!」

熱く吐息を切らしながら、熱心に訴えてくる妹賢者。

その声に合わせ、兄の腰に擦りつけている尻房の奥——小さな菊穴が、物欲しそうにヒクヒク震えている。

(メルのお尻の穴……)

ついさつき、妹の熱い舌先で自らの菊穴を丁寧に舐め穿られたことを思い出す。まだムズムズしていて、何とも言えない疼きを感じる。

今のリオンには、そこもまたメルを悦ばせる——少しでも早く一緒に達するために、責めるべき場所だと思えてならない。

気づいたときには腰を掴んでいた右手を外し、結合部から滴る淫汁をすくい取った人差し指を震える穴口に押しつけていた。

つぶつ……そんな小さな音を鳴らして指先が埋まると、妹賢者は菊穴を形作る皺を激しく震わせながら、髪を振り乱すようにして大きく喘ぎ悶える。

「ひやうつ！ くうつ、ひふあああああああ！ お兄様、そこおつ、メ、メルのお尻も愛してくださるのですか？ んう、嬉しい……メル、幸せですうつ、あふつ、そこおつ、お尻い……メルのお尻いじりながら、もつとオチンポくださいっ♪」

「メル……くうつ、ああつ、も、もう、俺……ううつ！」

こんなこと、してはいけない。そうわかっているけど、動きを止められなかった。飲まされた薬のせいかな、それとも無理に押し殺し続けていた愛情が燃え上がっているせ



せーしいつ、熱い赤ちゃんおひりゆつ、びゆるびゆるうつ、んふつ、すぐおいつ、し、子宮にちゃんと染み込んでくりゆつ、いっばいつ、はへえ……はあつ、ああ！」

メルはだらしなく表情を緩め、光の消えた瞳で遠くを見ながら熱く叫ぶ。

幹胸が痙攣してドクンツと力強く白濁が迸る度に、メルはさらに大量の熱液を搾り取るうと言わんばかりに膣内全体を締めてきた。

「くふつ、んんつ、もつとおつ、もつといっばい子宮につ、はひつ、はあんんつ！ お願
いします、おにいしやまあ……はへえ、はあ、あんつ、あはあつ！」

「くつ、ううつ、メル、し、締めすぎ……くあつ、あああつ！」

彼女の尋常ではない執着を感じさせる圧迫に促されるまま、リオンは下腹部全体が痺れる極上の絶頂に浸り続ける。ずつと根元に感じていた熱がようやく消え、生まれて初めて味わうと言ってもいいくらいの解放感と共に強烈な疲労が腰や下腹部に襲いかかってきた。「くつ、はあ、はあ……うつ、あ……」

軽い目眩も感じ、そのまま尻餅をつくようにへたり込む。

自然と肉槍も膣壺から抜け落ち、パツクリと丸く口を開けたままの膣口から注ぎ込んだばかりの、液体というよりも固体と呼ぶほうが相応しいほど濃い白濁が吹きこぼれる。

「はあんつ、ああ、ダメ……ちゃんと受け止めないと……んふつ」

恍惚と余韻に身震いしていたメルは、そう言うところから取り出した銀の器を自らの

股間にあてがい、流れ落ちてくる精液を受け止めた。

「はふっ、とつても濃い精液……これなら、ちゃんと条件を満たせるはずです。よかったです……お兄様、待っていてくださいいね。ふふっ、あはははっ」

暗い瞳のまま、嬉しそうに笑う愛妹。顔を横に向けた彼女の視線の先には——斧杖と並んで床に転がる、分厚い古書がある。

（あの本……何なんだ）

今度は自ら動き、積極的に妹と交わってしまった。

射精の余韻と共にわき上がってきた罪悪感を噛み締めながら、兄勇者は考える。

今日一日のメルの言動と行動には、明らかに何らかの作意を感じた。

（何を企んでいるんだ、メル……）

それは『魔王』としての、よからぬことなのか。

それともただ兄を想う気持ちが悪走してのことなのか。

「はふっ、んっ、ふふっ……このまま進めていければ、あの日がとつても素敵な日になります。ああ……待ち遠しい♪ あはっ、あはははっ♪」

真意を探るようにつめるリオンを振り返ることもなく、自らの膣口から溢れる白濁を丁寧を受け止めて溜めるメルは、絡みあう触手しか見えない窓に視線を向けていた——。

妹魔王は光の消えた瞳を恍惚と細め、その昂りを訴えるように自らの指を乳肉に深々と埋め、ふくらみを大胆に捏ね始める。

乳球は不規則に形を変え、その度に谷間の屹立を刺激してきた。

圧迫感が強くなつたと思つたら、すぐ弱まる。先つぼだけがギュツと包まれた直後、今度は横側が火照る乳肌でそつと撫でられた。

「んくつ、ダメだ、メル。も、もう……はあはあ」

「いいんですよ、遠慮なさらないでください。妻が夫をいたわるのは当たり前のことなんですから。こうして、身体を使ってご奉仕するのは務めの一つです」

下半身全体が痺れるような感覚に、顔を歪めて必死に訴える兄勇者。

うつとりとそれを見上げるメルは、むしろ乳房に食い込ませた指の力を強め、ふくらみを大胆に大きく揺さぶり始めた。

ニチュツ……ぐちゅつ、ぬつぶつ、ぬりゅつ。

肌同士の摩擦でより熱くとろみが増した粘液が、淫音を盛大に鳴らす。歪に揉み潰された双丘の谷間で、剛直は目まぐるしく扱かれる。

どれだけ強く押しつけられても、膺壺のような狂おしい圧迫感はない。

粘液の滑りもあり、どこまでも淡く優しく表皮を擦られるような刺激。

それだけに、悦楽もじわじわと根元からゆっくり込み上げてくる。

精神的にはもう我慢できないと感じながらも、肉体が追いつかない。

妹を止めるための言葉など何一つ思いつかず、もう乳スポンジに身を委ね、ただ少しでも刺激を増そうと腰をカクカクと突き上げるだけになってしまう。

「あはあつ、ああ……お兄様がメルのおっぱいで気持ちよさそうにしてくれているの、嬉しい。ふふつ、薪割りの後に腕や肩を揉んであげるときと同じ……いいえ、それ以上にうっとりとした顔。嬉しい……んふつ、はあ、メルも見ているだけで気持ちよくなっていますう、はあ、あはつ、はあはあ♪」

次第に息を荒くしてきた愛妹は、それに合わせてより乱暴に乳肉を捏ね回す。

パン生地のように形を変えるふくらみ。その中央でツンと尖る可愛らしい乳首を集中的に兄勇者の腹筋に擦りつけ、貪欲に悦楽を貪ろうとしている。

擦りつけられるリオンのほうも、硬い肉粒でくすぐられるような刺激が心地よく、ようやく肉体の昂りが射精を求める精神的な興奮に追いついてきた。

「くふつ、ううつ、で、出る……もうつ、はあ、はぐうつ、ああつ」

「出そうですね？ 困りました……せつかく綺麗にしたのに、また汚れてしまいますね。でも、お兄様にたくさん悦んでもらえるのがメルの幸せ……妻の幸せです。だから、どうぞ、はあはあ、たくさん、たくさん出してください♪ メルのおっぱいと顔、お兄様の匂いで染めて……んふつ、ふふつ」

我慢できずに呟き漏らした兄の声に、妹魔王は火照る頬をわずかに緩めて微笑み、揉み潰した乳房を大胆に揺さぶる。

粘液を塗り込まれたリオンのふとももで弾むように、たぶんっと大きな音を立てて揺れ動く双乳。幹竿も既に隅々まで粘液塗れになってしまったせいで摩擦が弱くなり、その動きはどんどん加速していく。

にちゅっ、ぐっちゅっ、ぐっちゅっ、ぐちゅううっ、にちゅううっ！

鈴口から溢れるカウパー腺液が混ざり、クリームのように白く泡立っていく粘液。

竿肌になんか少しづつ染み込んでくるそのせいで幹胴が燃えるように火照り、もうどんなに優しい刺激でも反応してしまうくらいに快感神経が過敏になってきた。

「イイツ、くっ、はあはあっ、ううっ、メ、メル……俺は……うっ、くうう！」

何一つ抵抗することもできず、ただ流されて喘ぎ悶えている。

そんな自分の情けなさ、メルに対する申し訳なさを噛み締めながらも、リオンは頭の先から爪先まで甘く痺れて意識が遠のいていくのを繋ぎ止められない。

左右からグイグイと押しつけられる乳丘を押し返すかのように、幹胴がふくらむ。

全体が小刻みな痙攣を繰り返し――。

「はあはあ、どうぞ、お兄様！ メルの顔にいつ、おっぱいに……んふっ、お兄様の熱いお汁っ、メルで興奮してうんと濃くなったザーメンいっぱいかけてくださいっ♪」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

夢幻姫姫
フェイゴラ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげよう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリードム120%!?
ジャンルにこだわらない
ジャンルにこだわらない
ドキドキラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

異世界
オタク
オタク
オタク

二次元ぶち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあり!!
電子書籍で読めるエロチカヘル!

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
「アクトラインノベルズ」
から書籍化!



ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル!!

二次元ドリーム文庫